だけ其れだけ一層自分としては其德を敬慕して已まぬ、斯程の細事迄何處迄も約束を嚴守された故人の性格を憧憬し、趁はんとすれども今は影だになく、俗界を脫して新塋の下長へに平和の眠に就かれたのである、噫。

(六) 西川君に就て

武岡豐太

予か西川君の名を知りしは、今より殆ど二十年前、君が丹波園田家の珍藏名幅渡邊華山の一葉竹を購はれし時に在り、後機會ありて君と語ることを得しに、一美少年にして彼の一葉竹は此人かと驚きたり、爾後文墨の交絕えず君か展觀も再三拜觀するを得たり、愛藏は重を文人に置き明淸名家の作品も多數ありしと記憶す。

明治四十五年平野祥福寺書院改築の計畫あり、發起人として神田兵右衞門、鳴瀧幸恭二君の驥尾に附し其建築費を有志に需むるに當り、三人同伴榮町二丁目元正金銀行支店なりし鈴木商店を訪ふ、予君を知るを以て先づ刺を通ず、君會見して予等の挨拶を聽き、樓上に一往して着席し、直に鈴木岩治郎君の名に於て壹千金の記

入を爲す、三人相顧みて喜色あり、是れ君を商店に訪ふの始とす。

大正四五年の頃、人事に就き今の商店を訪ふ、机上簿書堆積の間に引見せられ、頼談の要旨を聞き直に其記入を時の課長に命ず、決斷瞬間驚異の念を抱きたり。

同八年三月、同好者と大和繪の展觀を爲せしとき、君令夫人と共に來觀し、色彩の燦然たるに驚き、且歴史・風俗・人情・工藝を見るべきを悦び、意大に動きて今後其研究を共にせんと語られたり、那ぞ知らむや此時こそ予に於ては永訣となりしなれ。

君蘊蓄彼の如く、筆札堂に入り老大家の風あり、慧敏果決も亦記述する所の如し所謂百里の城を寄せ六尺の孤を託すべき人也哉、予に於ても一益友を喪ひたるの歎禁ずる能はざるなり。

(一九) 追悼一夕話

西村正雄

大正九年五月十八日夜、京城支店濟美寮に於て、故人追悼の爲の小集あり、本篇は其席上に於ける余の談話を、店員某氏の筆記せるものに、多少の修補を加へ

たるものなり。

吾が本店支配人西川文藏氏は、去る十五日を以て溘焉として永眠せられ、明十九日密葬、來る二十三日本葬の豫定にて、御遺骸の此世に在るも今夜限りなり、茲に今夜を卜して京城支店は追悼の小集を此宿舍に催され、故人の歸依せられたる東本願寺の僧侶に讀經を賴み、故人靈位の下、吾々迭みに故人の德を偲び、其事蹟を語り合ふは、洵に結構なる企にして、仰いで靈位を眺むれば故人在天の靈髣髴として來り臨むの感あり、余は最近數年間、業務上比較的親しく故人に接近し居たる緣故上司會者より故人に關する追懷談を所望せられ、御受けしたる次第なるが、扨顧みて故人生前の事を思ひ回らせば、萬感交々胸に迫りて先後の順序を立つるを得ず、思ふ所多くして言ふ所之に伴はざるべし、乞ふ幸に諒せられんことを。

故人は明治二十七年、東京高商在學中、半途退學して入店せられたるもの、元來近江にては、子弟の敎養上學校よりも商店の奉公に重きを置くの風習あり、高等小學卒業をすら待たず、概ね尋常卒業の儘豫め約束せる京都・大阪・神戸邊の商店に預けらるゝを例とす、惡戲盛りの少年を嚇す場合、他地方にては「左樣惡戲をすると丁稚

に遣るぞ」と言ふに反し、近江にては「丁稚に遣らぬぞ」と言ふ、斯く近江にては、子弟の丁稚に行くことを、父兄としても喜び、子弟自身としても名譽とす、故人の場合に在りても亦恐らく一片の卒業證書を手にするよりも、寧ろ一日も速に實務に就くに如かずと、父兄も御當人も考へられたるものならん。

當時本家の先代尚御在世中にて、故人は故參番頭たる柳田氏・金子氏を始め、他二三の店員と共に結界の中に座して、直接先代の監督の下に執務せられ、主として帳面と英文通信とを受持たれたるものゝ如し、金子氏が故人の生前何かの話の序に「最初西川氏は商賣が出來るか何うかと危みたるが、流石に近江の人だけありて立派なる商賣人となりたり」と語られたるが、是を以て見れば當初は商賣には深く携はらしめられざりしならん、又店の先輩と親交ある現南朝鮮鐵道社長坂出鳴海氏の談に、同氏が高等學校在學時代、金子氏より上海香港等と往復する電信コードを作つて呉れと頼まれ、暑休を利用して作りて差出したる處、文藏さんに見せて相談して呉れとのことに、初めて西川氏と言を交はし、共に研鑽推敲して之を仕上げたりと云ふ、年代より案ずるに、是れ故人入店後間もなき頃なりしならん、要するに當

時店内唯一の英文通として重寶がられしものなるべし。

當人の故人の仕事は、獨り事務上の事のみならず、店内外の掃除は固より、岡持を携へて豆腐買ひの使をも勤め、又先代が商用にて大阪へ往復せらるゝ場合は、必ず驛まで送迎すべき任務もありし由、先代は餘程嚴格几帳面なるお方にて、執務中一寸にても傍見するものあれば、直に叱責せらるゝを例とし、又故人等が驛へ先代を送迎する場合は、必ず車の先頭に立ちて疾走する樣命ぜられ居たりと云ふ、其意蓋し然かせざれば事ある場合に役に立たずと云ふに在り、故人曾て「先代には度々叱られた」と笑つて語られたることあり、故人は入店當初、實に此の如き環境より深き印象を受け、以て其人格を大成せられたるものなり。

先代は、故人入店の年か其翌年かに長逝せられ、故人は爾來お家樣と重役の方々とを輔翼して、奮鬪努力店運の隆昌に貢獻し、明治三十何年なりしか、本店が合名會社組織と爲るや、擧げられて支配人となり、其活動部面年と共に擴大しつゝ今日に至れるものにして、故人入店後の閲歴は、全く本店興隆の歴史と一致す、今や大戰の後を承け、列國鎬を削りて産業競爭に從事せんとし、本店の前途亦頗る多事なるの

秋に方り、天一朝斯人を奪ふ、痛恨何ぞ堪ふべけんや。

故人の性行には吾々の學ぶべきもの多し、否故人の全人格其ものが、其儘吾々店員の生きたる龜鑑なり、余は第一に、故人の秀でたる技能として、帳面のことを擧げざるべからず、故人は久しく帳面を受持たれたる由なるが、凡そ記帳員の苦しむ所は、御承知の通り試算表を作りて貸方と借方との合はざることなり、若し二三日分も溜らんか、双方容易に合致せずして其原因を探すに多くの時間と勞力とを要すること、何人も經驗ある所ならん、然るに故人は人員少く事務繁多なる爲め、帳面が一ヶ月分位停滯して、之を一時に片付けざるべからざるが如きこと屢々ありしが其れにも拘らず毎に貸借は立ろに合致し、未だ曾て其合はざるに苦みたることなかりしと云ふ、卽ち記帳員に必要なる、敏速と正確とを兼備せられしものにして、吾々到底及ぶべからざる頭腦を有せられたるものと謂ふべし、年少の店員にして、記帳を受持たしめられたる者、未だ一二年も經ず、然かも依然として貸借の合はざるが如き未熟なる腕前を以てして、疾く他の事務に移らんことを希望するものゝ如き、當に愧死すべきなり。

次に故人の手紙は、又天下一品なりき、其判り易くして且見事なる筆蹟、其周到にして滋味ある文致、而して一篇の手紙を書く間には、幾回となく人に接し、重役室へ往復せざるべからざるが如き多忙裏に在りて、嘗て草稿を用ひらるゝことなく、筆を下せば千萬言立ろに成る底の速さ「現代實業界多士濟々、中には文筆の人亦乏しからずと雖も、是れ丈けの手紙の書ける人は恐らく絶無なるべし」とは、故人の文章に對する森支配人の批評なりしが、森氏は人の知る如く妙文達筆の士にして、此點に就ては多く人の追隨を許さざる人、而も此人にして此批評あり、以て故人の眞價を知るに足るべし、序ながら茲に一言したきは、近時學校にても教科目多くして、文章殊に候文體の書簡文の練習には、餘り重きを置かれざる現狀なれども、世に處し人に對し自己の意思を發表するには、一に書簡文に依らざるべからざるものなれば、其巧拙が交際上事務上將た事業上、重大なる影響あるを忘るべからざるの一事是れなり、苟も實業界に立ちて成功せんと欲する者は、決して書簡文の練習を等閑に附すべからず、我店にても余は是れ迄、支店長・工場長等の自筆の書面を接受する地位にありたるが、何れも皆妙を極め、通常下級者の認むる書面とは、到底比較すべ

くもあらず、余は常に是等の人々が、現在の地位に進めることの偶然に非ざるを感ぜり、是れ年少店員諸君の深く考ふべき所なり。

次に故人に就て吾々の感歎する所は、其職務に忠實勵精なるの態度なり、現時何處の會社にても重役級の人々は、遲く出で早く歸るを常とするに拘らず、故人は一般店員と同時に出勤し、退出時刻後衆員散し盡して後も、尚居殘りて執務せらるゝを例とし、來客の中には往々故らに其時刻を目懸けて來訪する者も少からざりき而して其事務に當らるゝや、些事と雖も苟もせず、余の擔任したる事務の方面に就ても、此種輕易の事項は人事係へ一任せられても差支なかるべしと思はるゝ程度の事に至る迄、深く前後左右の形勢利害を考へられ、然る後にあらざれば決裁を與へられざりき、而して故人は御承知の如く、殆ど全く支店工場等を視巡らるゝことなかりしが、是等の事も世間普通の實業家なりせば、左まで心配せずして留守を明けるべき場合なるに拘らず、故人の至誠至實なる、暫したりとも自己の中央舞臺に不在となることを、痛く憂慮せられたる結果に外ならず。

故人は又公私の別を明かにすること極めて嚴格なりき、昨年春故人の嚴父近江

にて逝去せられたるが、故人は其重態の時見舞はれたるのみにて、臨終の際は歸鄉せらるゝことなく「最早名醫をも聘して診察せしめ、一度見舞に歸りたることにもあり、定命と諦め居れり」とて、依然出勤執務し居らるゝに對し、吾々は所謂大義親を滅すとは此事なるかと、其店務を大切にせらるゝ衷情に感じ入りたりき、斯かれば故人は、凡そ私事の爲に店を休まれしことは前後全く無かりしなるべし、故人が、店員の人々の其私邸へ往訪することを厭はれたるが如き、又公私の區別を明かにせる一例に數ふべし、又故人の令孃は昨年神戸の縣立女學校に入學せられたるが、此學校は入學志望者十倍にも達し、餘程優良の成績にあらざれば入學することを得ざる爲め、幸に入學し得たるものは、當人は勿論父兄に於ても痛く之を誇りとする實狀なること、子を持つ親の知る所なるが、故人は右の如く令孃が首尾よく入學せられたる際に於ても、同室の昵懇なる同役森支配人に對してすら、一言も其事を語らるゝことなかりしと云ふ、是れ一は故人の謙讓の德より出でしものなるべきも又一は家庭の私事を事務室にて語り合ふべきものにあらずとする、公私甄別の主義より出でしものに外ならず。

吾々は又故人の温情に關して追懷する所多し、余は職務上屢々店員の不幸に關して故人に報告を爲し、又は其指揮を受くる場合ありしが、是等の場合に現はるゝ故人の濃かなる情誼は、眞に自家の家族子弟に對するが如きものあり、其際故人の言はるゝ所思はるゝ所は、必ずしも一々當人又は遺族に傳達することなかりしも局に當りし吾々は、常に感佩措かざる所なりき、其他店員に轉所轉務を命ずる場合等に當りても、他の會社ならば專ら會社の都合に依りて決定せらるゝを常とするも、故人は一面當人の利害得失をも考慮に加へられ、健康の良否家族の多少等は特に重きを置きて參酌せられたりき、此の如く温情を以て店員を遇する一方には、苟も非行ある者に對しては、假借する所なく處分せらるゝを常としたり、要するに恩威並び行はれたるものと謂ふべし。

故人は書畫に興味を有せられ、相當の眼識をも有し居られたりと云ふ、曾て其所藏の書幅數十點を撰びて寫眞版の畫帖と爲し、知人に配付せられたることあり、余も之を頂戴したるが、此等の愛藏品も其後賣却せられたりと云へば、其書畫癖も至つて恬淡なる方にて、徒に所藏品の多きを誇る方にはあらざりしものと見ゆ、其他

道樂とも云ふべきものは全く無かりしものゝ如し、碁、將棋、玉突は勿論茶花、音曲等一も之を弄ばれしを聞きたることなし、酒は以前は全く嗜まれざりし由なるが、近頃は宴席などにて多少之を用ひらるゝを見たり、晩酌に就ては聞く所なかりしも恐らく其習慣なかりしならん。

次に此は店の先輩共通の事にて、特に故人のみの長所として數ふるに足らざることなれども、私産の增殖といふ如きことは、全く故人の念頭に無かりしものゝ如し、故人程の地位と交際と經濟上の知識とある者は、何人と雖も多少の有價證券を所有し、定期には關係せざる迄も、其高き時に賣り安き時に買ふ等の事を爲さざるはなきに、故人は此種の方面の事には全く沒交渉にて、四六時中其頭腦を往來するものは、偏へに店務の事に限られしものゝ如し。

要するに故人は人格の人にして、一には全力を店務に捧げて一身一家を顧みず二には質實なる生活を旨として、浮華贅澤なる習に染まず、三には一家兄弟の情誼を以て店員に對すと云ふが如き、誇るべき我店の店風を眞に文字通り躬行實踐せられたるもの、卽ち故人を目して店風の權化なりと云ふも可、故人の人格に依りて

我店の店風が樹立せられたりと云ふも亦不可なし。

是を以て三千店員は、故人を直接に知ると否とに拘らず、何人も故人に推服せざる者なく、事務上人事上三千店員の統率は、一に全く故人に依りて行はれたりき、御承知の如く我店の重役は餘程傑出せる人にして、且一々青年店員に接せらるゝ場合に乏しきを以て、上下の間動もすれば相疎隔するを免れず、此等の事態に對し、故人は身を以て兩者間の楔若くは鎹たらしめしものにして、上意下達下意上達が實に故人に依りて圓滿に行はるゝ實狀に在りしことは、其事例を知らざる人と雖も恐らく之を想像し得て餘あるべし。

故人は本來頑健にして、病氣の爲に缺席せられたることは、今回迄全く聞きたることなし、金子氏も曾て「西川さんがあの劇務に堪へらるゝは、全く健康のお蔭なり人間は健康が第一なり」とて、感心せられしことあり、此の如き健康體なりしに拘らず、年尙壯にして一朝不歸の客となられしは何ぞや、之に付けても吾々は彼の健康と壽命とは別物なりとの、宗教的觀念に立歸らざるべからざるを覺ゆ、故人が罹病後語られたる所によれば、二三年前より折々便の色黑きことありしと云ふ、故人は

別に意に介せられざりしも、今回の主治醫の言に依れば、是れ全く胃の出血の結果なりし由にて、卽ち今回の致命症と爲りし胃病は、數年前より兆し居りたるものなるべく、早きに當りて治療せられしならば、或は此の不幸を見ることなかりしならんに、噫全く壽命と云ふの外なし。

終に臨みて、余は店の主從の美しき關係に付き一言を添へざるを得ず、十五日夜當地に着かれたるお家樣が、故人の訃音を聞かれたる時の御心持は如何なりけん十六日朝余が見舞を申上げたるに際し、一言「代りが無いからね」とて、暗然として涙を流されたるには、余も胸塞がりて慰藉の言葉出でざりき、お家樣は十六日夜匆々に京城發、今十八日朝神戸に着かれたる筈にて、恐らくは人の止むるを肯かれず、故人の遺骸に對面せられ、涙と共に永き別れを告げられしならん、春風秋雨三十年に近き歲月の間、眞に寢食を共にせられ、相共に店運隆昌の慶を分たれつゝある今日一朝斯人を亡はる、誠に骨肉に別るゝ御感じありしなるべし、吾々は此事が、此後お家樣の御健康に障ることなきやを憂へ、其然らざることを祈らざるを得ず。

余の追懷談は之にて終を告げん、吾々は平素業務に忙殺せられ、靈の事壽命の事

神の事、其他宗教的問題を考ふる機會少きも、今夕の如き場合に、靜かに故人の事を憶ひ回らせば、遂に靈魂不滅の問題に想到せざるを得ず、冀くは此の如き機會に、共に暫く靜思默索に耽らんことを。

附おもかげ

(一)

○箸箱　十二時に食堂開かるゝや、故人は年少店員等と同じく、待ち兼ねし態にて、急ぎ箸箱を携へ食堂に行かるゝを例とし、要談中にても相手が店内の人ならば委細構はず談を中止せられたりき、元來晝食を急ぐは胃腸の健全なる證なれば余等は屢々人と共に其健康を羨みたり、嗚呼故人が箸箱を持ち、夏は上衣を脱ぎたる儘、サッサと室を出て行かるゝ姿、今猶眼前に見るが如し。

(二)

○葉捲　煙草には餘程嗜好を有せられ、特に葉捲を愛せられたり、從つて來客にして要談長きに亘るものには、机中より葉捲を出して之を薦めらるゝを例としたり、間々遠慮なき店員は「一本戴きませうか」と催促し、故人の莞爾として之を手交せらるゝを見ること亦屢々なりき、同僚大野君の「灰皿」の弔歌には、愛煙家ならざる者

も、誰か腸を斷たざるべき。

おもかげ（三）

○封筒の裏　余等は事務上、日に幾回となく見習員を使として故人の室へ呼ばれたりしが、其輕易なる事項に付ては、余等の勞を慮られけん、要領を書き記して使に持たしめらるゝこと亦多かりき、而して其場合、新しき便箋を用ひらるゝことは絶えて無く、新しきメモを用ひらるゝことも稀にして、多くは來着の郵便封筒を破り、其裏面に記さるゝを常としたり。

おもかげ（四）

○親しむべき人　故人は本來寡默の人にして、且輕き吃音の癖ありき、其れ等の爲にや、余等は最初謁を得たる節は、自ら畏るべく近づき難き人なるが如き感を起したりしが、幾ばくもなくして、如何にも親しむべく物の言ひ易き人なりと感じ、遂には全く父兄と同じく同體一心の感を以て接するに至りたりき、唯何處となく毅然として狃るべからざる點ありしは、人格の光とや謂ふべき。

○黄昏車上　故人一日の執務を了りて歸宅せらるゝ際は、店前金熊の車に乘らるゝを常とし、其退出の遲き夜と雖も、金熊は必ず爲めに一臺の車を準備し置く例なりき、車賃は何程なりしや知らざるも、二三年來物價騰貴の爲め、十錢づつ祝儀を與ふることゝせりとの故人の直話を聞きたることあり、思ひ回らせば電燈星の如き店前の黄昏に、故人車上の後姿を見送りたること、そも幾度なりしぞ。

おもかげ（六）

○ビヲフエルミン　一日食後白き錠劑を用ひ居らるゝを見、如何なる藥なるやを問ひたるに、之はビヲフエルミンといふ新藥にて、金子氏も之を用ふ、胃腸に卓效ありとのことに、余も當時胃腸健ならざる場合、直に之を購求して其奏效の顯著なるを感じ、同患の人々にも勸めたることあり、嗚呼此藥に依りて病苦の快癒せる者も少からざるべきに。

おもかげ（七）

○諧謔　故人は眞面目なる人にて、平素諧謔を弄せらるゝが如きことなかりき大正八年九月某日、桝本卯平氏、華盛頓國際勞働會議に、勞働者代表使節として參會

せんとし、暇乞に來店せる際、故人外二三の先輩氏を兵庫常盤花壇に招きて午餐を供せらる、余亦席末に陪す、宴終りて一同玄關に出づるや、故人一老妓を顧みて、近頃何うかと問ふ、老妓、温習會にて稍々忙しき旨を答ふ、故人曰くお前でもまだ稽古するのかと、一座腹を抱えて哄笑せり、是れ余の聞きし故人の最初にして又最後の諧謔なりき。

(三〇) 西川文藏君を惜む

西和田久學

故西川文藏君と予が始めて知合になりしは明治廿八年にして、鈴木商店が内海岸通に在りし頃なり、共に二十二三歳の青年にして、予は未だ一介の書生に過ぎざりしも君は當時既に、同商店の新人材として大に擢用せられ居たり、爾來數年間は、親友の交誼を續け居たれども、予が明治卅一年に三菱會社に入り、同卅二年農商務省に轉じ、製鐵所鑛山局等の官吏と爲りてより、君との間は自然疎遠となり、互に相見ざること殆ど廿年に及びたるが、大正六年春、予は官を辭して浪人生活に入り、茲

に久振に君を鈴木商店に訪ひたるに、君は予を見るや否や、直に椅子を離れて久濶の辭を交はし、互に健康を喜びたるが、君は風貌に於ては、廿餘年前の昔と毫も變りなきも、職は最早一店員に非ずして、支配人の要職に昇り居たり、是れ全く君が廿數年間に亘る忠實なる精勤と、崇高なる人格との然らしめし結果なるべし、爾來予は屢々同店に君と相見え、再び舊交を温むることゝなりたるが、何れの會社官衙にても、要職に在る人士を訪問するときは、暫時應接室に待たさるゝ場合多きも、西川君に於ては、予が君を訪ふときは、如何に多忙の際と雖も直に接見せられ、未だ一度も寸秒の時間をすら空しくせしめられざりしこと、實に君の友情厚きに因るものと予は衷心常に感服せり、又予が鈴木商店の他の幹部員に用ありて面會を求むるも多忙の故を以て其機會を得ること困難なる場合は、予は用事を總て西川君に依頼し置くを例とし、君は必ず之を同幹部員に傳達したるものなり、之を大きく謂はゞ鈴木商店と予との間に於ける意思の疏通は、西川君に依りて爲されたるもの多し然るに今此良友を失うてより、予は斯の便を得る能はず、實に君の長逝は予に取りても一大不幸なり、思ふに斯くの如き不便を感ずる者は蓋し予一人のみにあらざ

るべし。

(三) 鈴木商店の柱石

依岡省輔

君は恪勤精勵而も温厚篤實の士、眞に鈴木商店の柱石たりしこと、能く人の知る所なり、君の執務は誠に繁多にして、能く常人の處理し能はざる所なりと雖も、縱横潑溂として而も一絲亂れず、店務を總括する常に整然たり、然して君は、此劇務裡に在りて悠揚迫らず、常に餘裕の綽々たる風格ありし事、人皆敬服せし所なり、卽ち君は書畫鑑定に卓越せる見識を有して斯界に名あり、居常身邊に掛軸用の矢筈を備へ、事務室の楣間掛釘の用意完し、客あり、往々君が劇務を顧みず書畫の鑑定を請ひ來るや、欣然として之を迎へ、直に楣間に揭げて立ろに眞僞を鑑別し、唱嗟に筆を執りて其鑑識せる所を便箋に記し、時に數葉に亘る、說く所頗る懇切、恰も慈母の愛兒に敎ふるが如く、其紙質表裝の時代に適否より、落欵の風韻に至るまで諄々として說いて徹底せしむ、故を以て客皆感激し、斯道の達人も亦其鑑定記を見て悉く敬服

せり、君又喫煙家として有名にして、客あれば直に勸むるに和洋數種自ら彼此選擇し客の嗜好を求むる慇懃なり、喫了すれば復た勸め、客欣んて受くるや、其嗜好に適するを知り大に喜ぶの狀、劇務裡の人たる感なし、卽ち君の如きは才德完備、趣味高遠、眞に敬慕すへき風格を具へたるの士と謂ふべき也。

五月雨の夜な夜な君を偲ぶ哉　　岳　子

(三) 溫情至誠の人　　田宮嘉右衞門

故西川氏資性溫厚宏懷、言行恭敬悉く至誠に發す、是故に氏の對話常に生動し、胸中何等の墻壁なく、溫情溢るゝが如し、殊に下を導くに極めて篤く、問に答へて其理解するを見滿悅せらるるの狀、坐ろに氏の意氣に感せずんばあらざるものあり、之が爲め氏と語る者、縱令其對話の裡、策を弄せんとすと雖も、忽ち氏か溫情至誠の發露に打たれ、翻然として肝膽を披瀝するに至ると云ふ、宜なる哉。

古人句あり「月天心に到る時、風水面を度る處」と、予は居常此句を愛誦し、吾人の胸

懷須らく斯くありたきを思へり、曩日氏の襟度に接する毎に、此句の感懷を深くし欽風敬慕禁ずる能はざるものあり、思ふに氏が躬行の敎化は、鈴木商店の進展と共に長へに不朽と謂ふべし、茲に、予の最も深く感受せる氏が風格の一端を錄して、畏友森衆郎氏の梧下に呈す。

(三) 追懷の辭

日野誠義

我が鈴木商店に於て、淸廉潔白にして溫厚篤實なる紳士を求めんには、必ず先づ指を故西川氏に屈せざるを得ず、氏は其人と爲り謹嚴にして勤勉、人と約するや時刻を違へず、前言を食まず、努力奮鬪倦まず撓まず、而も終始一貫せることは恰も軌道を奔る汽車の如く、指導誘掖身を以て範を示し、肯て筆舌を以て人を敎へず、故に一回も演說を試みしことなく、又筆鋒を揮ひしことなし、然れども共衆望之に歸し三千有餘の店員等、仰いで以て之を敬愛し、恰も嚴父慈母を見るの思あり、其逝ける時、店主偶々朝鮮に旅行し、尙往途に在りしが、之を聞くや慟哭痛惜、京城より直に引

返し歸り、之を弔慰して百方至らざるなし、店衆も亦之を聞き驚愕措く所を知らず眞に恃怙に別るゝの思を爲し、弔電星馳幾百なるを知らず以て其感化の深きを知るに足る。

金子氏は實業界の俊傑なり、理想高遠經綸雄偉、蓋世の才を以て事業を企て、萬艱畏れず千難屈せず、功成りて喜色なく、挫折して憂色なし、常に滿を持して放たざる弓の如く、邁進勇往、是れ氏が事業の成功せる所以なり、然れども此裏面には淳朴柳田氏の如き、純潔西川氏の如き、一意專心之を輔佐する人の在りしことを思はざるべからず、然らざれば其功績、或は今日の如くなる能はざりしやも知るべからず、宜なり金子氏が、兩氏を左右の翼と爲し、後繼者と賴めること、而るに一朝夭折し、其れをして遂に空望に歸せしめしは、眞に惜むべきなり。

氏は明治二十二年入店し、金子氏の直轄事業たる樟腦の購入販賣等に從事し、傍ら記帳を掌りたるが常に職務に忠實にして、己れの仕事は必ず己れ自ら之を爲し決して他人の手を借ることなく、如何なる煩雜の事も、其日の事は必ず其日の中に結了し、而も一點の遺漏あるなし、此の如く平生自己の職責を重んずると共に、他人

が如何程多忙を極むるも、決して之を顧ることなく、自己の仕事を終らるゝと直に歸宅するを常とす、是れ上長の鼻息を窺ひ用事も無きに徒に机案に向ふ者と其趣を異にす、動作の超然として衆に卓越せること此の如し、而も上長下僚一人として之を怪む者無し、是れ其德を信ずるが故なり。

又算數と筆蹟の巧妙迅速なる、殆ど天禀とも謂ふべく、之に匹敵すべき者なし、頭腦の明晰にして綿密なること以て見るべし、是を以て記帳上の過誤は嘗て一回も之なし、其青年輩の記帳の粗漏にして違算あるを見、莞爾として微笑を漏されしは余の往々見し所なり、凡て商人にして計算の粗漏なるが爲に、其損益を顚倒せること其例少からず、蓋し多くの失敗は因を此に發するなり、又其筆蹟に至つては殆ど書家に匹敵す、屢々金子氏の爲に代筆せられたるが、其迅速輕快の筆致見る者をして驚歎せしむ。

余が初めて氏に接したるは、明治三十七年の中夏炎暑爍くが如き日なりき、然るに氏は儼然として端坐し、衣服清楚風姿端麗、一見貴公子を見るの思あり、私に敬意を表したり、爾來最近に至るまで、交れば交る程禮儀に厚く、阿諛を斥け虛禮を排す

余其嚴正なるに感服せり。

明治四十一年二月支配人の職に就くや、繁劇なる萬般の店務は悉く氏の双肩に懸り、一々裁斷を爲すに至れり、然るに常に最善の方策を盡し、能く之を遂行して一點の缺陷なかりき、偶々我等が氏の意見に對し此は斯くあるべきにあらずやと進言する時、若し其意見正しからんには直に之を容れ、且自ら其謬見なりしを言ふに吝ならず、其態度に一點の私心なく、光風霽月の如き感ありき、余は人と意見を鬪したること少からず、多くは皆百方自己の僻說を辯護固執し、或は自己の權威を以て之を擁護し、甚しきに至りては他を壓迫するものあり、氏の如きは實に從來未だ曾て見ざる所なり。

氏は謹嚴の紳士なり、他の店員と私交するを好まず、是を以て余は氏を訪問せしこと十有六年間唯二回のみなりき、一回は友人を其令兄の店舗に使用せられんことを依賴するが爲め、一回は年首の回禮なり、氏は常に曰く、元旦店にて相會し互に賀詞の禮を交換するが故に、往訪は不用なりと、以て其平生を察するに足る、別項述ぶる如く、氏が店務を終へて歸宅するや、書畫骨董を愛玩し、以て一日の煩累を忘る

丶を常とせり、所藏亦少からず、就中賴山陽と渡邊崋山とは、其最も崇拜する所なりしと云ふ。

氏は嚴格の人なりしを以て、從つて他人の過失を假借せず、詐謀に至りては之を憎むこと最も深かりき、嘗てカーロウイチ商會の破産に瀕するや、番頭糸山某直に現金を持參すべしと詐りて貳萬餘圓の樟腦を持歸り、日を經て持參せず、如何に催促するも應ぜず、氏是に於て大に怒り、直に車を同商會に馳せて百方嚴談の結果、右荷物の既に香上銀行の保管に移れるを知り、乃ち轉じて同行に赴き、遂に之を回收し損害なきを得たり、又曾て知人岡田某を推擧せしに、其人事務に練達せず停滯多かりしかば、直に之を解任し勸めて米國に赴かしむ。

又氏の親戚故舊、氏の勢望を慕ひ、因緣入店を希望する者亦少からず、此際氏は一々之を重役金子氏等に謀り、而して後其採否を決し、專斷せしことなし、若し其中の一人にても不都合の行爲あらんには、直に之を解任し、親戚故舊の故を以て特に之を庇護することなし、是の故に人其公平無私に服せざる者なし。

氏常に曰く、資本主は主權者なれば論外なれども、店員は皆同等なり、職務に高下

あれども人に上下なし、地位の高き者も決して驕傲の態度を持すべからず、宜しく同心協力、兄弟姉妹の如くにして事を處理すべきなりと、故を以て其支配人たるや常に同輩下僚に對して其人格を尊敬し、其權利を尊重し、毫も之を蔑視するの態度なし、是れ上下一般の同氏に對する尊敬一層篤かりし所以なり。

氏は固より宗教家にあらず、哲學者にあらず、又教育家にもあらず、唯其胸中一片の至誠あるのみ、此至誠萬般の上に流露發現し、以て斯く紳士の典型と爲れるなり。

方今我思想界は實に混亂せり、口に忠義仁愛を唱へて心に尊王愛國の至誠なく縱論横議徒に天下國家の政策を說き、以て自家糊口の資料と爲し、輕佻浮薄、俗論に阿り邪說に媚び、更に風教を顧みず、誠に痛嘆の至に堪へず、氏が四十七年の生涯中二十有六年の久しき我鈴木商店の爲に一身を捧げて倦まざりし至誠、嗚呼誰か師表と仰ぎ、國家の至寶とせざる者あらん、宜なり我商店が店費を以て其葬送萬般の費用を辨じ、祭祀の禮を厚くし、且未亡人と令息とを厚遇して永久に之を保護し、生活上些の顧慮なからしむることや。

氏の捐世せらるゝや、余往いて之を弔ひ、其眠れるが如き温容を熟視すること良

々久しく、雙涙潸然として胸を霑すを覺えざりき、既に歸りて眠に就くや、恍惚として氏の來りて我が枕頭に立つを見る、何か言はんと欲するものゝ如し、時に余は、西川君どうですか、御病氣は少し宜しき方ですかと問ひたりしも、答へなく、悄然としてやがて搔消す如くに見えずなりぬ、嗚呼君の靈や何か託することありて余を訪へるか、將た余が君を懷ふの切なる夢寐の間に其英姿を描けるか、如何に如何に、靈尚ほ我左右に在らば、再び姿を現して此迷を解け、思ふに人の此世に在る、縱令百年の壽を保つこと能はずとするも、せめて七八十歳迄は生存せしめたきものなり、斯くて相共に我商店の進運を輔翼せんには、必ず顯著なる功績成りて其隆盛を致し兼ては國利民福の一助ともなりたらんものを、思うて茲に至り、涙涌き胸塞がりて追悼の念禁ずる能はず、因て謹んで其一端を書す。

(三四) 人格と手腕　谷治之助

私の初めて西川氏を知るに至りしは、實に明治三十四年の交でありました、當時

の氏は眉目清秀で、一見貴公子の風丰を備へて居られました、爾來春風秋雨殆ど二十年、常に氏の懇篤なる眷顧を蒙り來りましたが、一朝病魔の爲に長逝せられて、再び氏の温容に見え謦咳に接するに由なきに至りましたのは、今猶ほ夢の如くで轉た追懐に勝へない次第であります。

氏は寔に景仰欽慕すべき人格と手腕を兼有して居られ、器資宏偉、忠誠重厚、警敏卓識等の諸性行を具備せられました、其人格と手腕を以て複雑なる店務を拮据鞅掌せらるゝや、克く事體に通曉せらるゝのみならず、終始一貫誠實を以て之に當らるゝので、處理裁決流るゝが如く、而も正鵠を失ふことなく、能く機宜に適はれたことゝ思惟せらるゝので、上信頼の極めて深厚なりしこと、下衆望の歸嚮したことは偶然でないのであります。

氏の文を作るや毫も苦心の跡なく、一氣呵成縷々注くが如く、萬語立ろに成るの概がありまして、而も簡潔明確、其要を悉して剩す所のなかつたのは、又以て文藻の豐であつたことが窺はれます。

氏の筆跡は夙に定評のありました所で、一度筆を執れば毫端飛ふが如く、而も老

蒼遒勁、他の模倣を容さゞる如くであります。

氏は骨董に趣味を持たれて、常に愛玩せられました、其鑑賞に於ても確かに一隻眼を有せられた樣に思はれます。併し之が爲に敢て累を爲すに至らざる所が、所謂骨董紳士と其軌を一にせざる所以でありまして、氏に於て始めて骨董を解するものと稱することが出來ませう、畢竟胸中別に悠々たる閑日月ありて、優に之を樂しまれたものに外ならぬことが偲ばれます。

嗟呼氏が非凡の偉才を抱きながら、年齡未だ知命に達せずして、忽然白玉樓中に入られしは、公にしては我鈴木商店の一將星を失ひ、私としては店員の師表を亡うた次第で、如何にも痛恨遺憾の極と謂はねばなりませぬ。

(三五) 毎朝三十分の勤行

井原五兵衛

予一日所用ありて西川支配人を中山手の自宅に訪ひ、所用を果して後雜談中、君曰く、頃者毎朝和讃を讀むに、僅に三十分時を費すのみにて、頗る心氣爽快を覺え、心

身共に清澄となり、些の邪念なし、故に健康維持の爲に大効あるを信ずと、予曰く、貴下の如き心身共に常に多忙を極むる職に在る人にして、特に毎朝三十分時の餘裕を作りて此勤行を怠らざるは、予の想像せざりし所なり、其之を行はれし動機如何と、君曰く、老父母の屢々神戸に來りて滯留する時、毎朝必ず和讃を稱へることを怠らざりしを以て、予も亦之を模倣したるに起因すと、予は君の此勤行と此言を聽き其精神修養と健康の保持に努めらるゝの性情に敬服すると共に、君は必ず長壽延命なるべしと信じたり、然るに未だ知命ならざるに現世を見捨つるに至りしは、予の深く疑問とする所なり、蓋し君は勤行の功を積んで佛陀の來迎を受けられたるにはあらざるか。

(三) 二十年前の西川君

服部馬太郎

西川文藏君は久しく病床に在り、親戚故舊の周到なる看護も其效なく、大正九年五月十五日溘焉として終に逝かれた、其訃音の傳はるや、生前知遇を辱うした者は

誰も皆痛惜しないものはない、私の君と相識つたのは實に二十四年前である、私は當時臺灣に居つたが、五年の後本店に歸任し、爾來茲に十有九星霜、其間交情極めて親密で、公私共に協力補助して、骨肉も啻ならざる關係であつた、君が前途有望の身を以て突然易簀されたのは、啻に君一家の不幸である計りでなく、鈴木商店の爲にも一大打擊である、私は過去の事跡を憶ひ出す毎に、恰も夢幻の如く温容髣髴として眼前に現はれ、感慨胸に滿ちて覺えず暗涙に咽ぶことがある、仍て既往を追懷して逸事二三を左に記述し、君を偲ぶ便にしたいと思ふ。

君の經歷は實に鈴木商店の歷吏を彩るもので、君の逸事を記すには勢ひ商店の狀況に言及しなければならぬ。

君は天資温厚着實で、同僚部下よりも愛慕信賴され、常に鈴木商店の樞軸と爲り重役を輔翼して事業を經營し、幾多の困難を排して擴張を企畫し、商店が遂に今日の盛運を見るに至つたのは、君が多年貢獻された功績の偉大なるものあるに由ると云ふも、決して諛辭ではあるまいと思ふ。

私は明治三十五年の春歸店したが、當時鈴木の本店は神戸市榮町三丁目の北側

に在つて、店員は總て前垂と稱する膝當を致し、事務を執るにも坐つて机を置き、其前に結界と申す膝隱を置いて仕事を處理して居つた、本店は樟腦と砂糖との二部に分れ、樟腦部は入口の東座敷、砂糖部は西座敷に在つて、君は當時樟腦部受持であつた、君は其當時より勵精恪勤、執務に敏捷であるのを以て好評を博された、卽ち毎日起生する仕事は、必ず其日々々に處理して了ふ方針で之が實行を期し、多少增務ありとも特別の事由のない以上は、大概歸宅の時間迄に必ず終結された、尤も其間に晝の仕度に自宅へ歸られた、然るに平常執る仕事は閑散であるかと云ふに、決して左樣でない、極めて繁忙で殆ど寸暇もない、從つて時間を守ることも嚴格であつた、在店二十七年間終始一日の如く、倦まず撓まず奮鬪されたのは世間稀に見る所である、君の人格の高尙なるは、之を以ても其一斑を窺知することが出來る。

君は縱令劇務に忙殺されて居ても、胸中綽々として餘裕あり、自ら慰安して樂んで居られた、卽ち其名の示す如く文を好まれて、能筆の譽高く、書畫骨董に趣味を持ち、同好者間に鑑識を以て知られ、又身邊にも嗜好を持つて居られた、所謂英雄有閑日月の類であらうか。

商店の内榮町に在る時代には、重役始め主任等皆年若く、元氣頗る旺盛で誠に面白い事が多かつた、其一例を擧げれば、當時本宅は本通榮町四丁目に在つて、商店は夜間取締の爲に重役主任等が交替に宿直を爲し、又英語教師を傭ひ、毎夜事務員小僧さん達に勉强させたものである、重役主任等は、晝間の殘務や翌日の仕事の段取等に忙しき爲め、宿直に來る頃は大概十時前後の樣に思はれる、其頃は丁度店の者も勉强を終へ寢に就く前で、恰も安息時間であるから、宿直者は之を利用して事務員小僧さん達を遊ばせる、其方法は角力、腕押、枕引、脛押、腕引(腕引には手拭を用ふ)等で、中々盛に運動したものです、小僧さん達は食事もなかなか搔込んだものですが其運動の濟む頃は夕食後大分時間も過ぎ空腹を訴ふる時である、そこで君の宿直の夜は、時々自費で蕎麥や饂飩等を振舞はれるので、小僧さん達は大喜びで君の志を感謝し、一層運動に身を入れるのである、斯樣にして君は若者小僧さん達を慰撫されるから、小僧さん迄も無邪氣なことを言うて、隔意なく君に接近し親密になる君も亦初より少しも變ることなく、親切と温情とを以て人に接せられたのは永久に記念すべき美德である。

當時の鈴木商店は現時に比すると規模も小さなもので、商業は內地移出の外は商館との取引を主とし、工業は旭町通の樟腦再製、雲井通五丁目の樟腦精製、薄荷工場位で、當時計畫中のものは大里製糖(現時日本製糖所)・錫取工場・飴工場等であつた其後本通榮町三丁目に移轉してからは、業務月に年に擴張して隆盛の氣運に向ひ現時では支店出張所が、內地と海外とを通じて其數四十を超え、工場は本店直營と關係會社の分とを合せて七十以上を算し、其事業は帝國實業界で重要の地位を占むるに至つた、斯くも盛況を呈したのには、其原因種々あるけれども、君の努力も亦與つて大なりと謂ひ得るであらう、私は之を思ふ毎に、今猶ほ君が在世の樣な心地がして、愛慕の情に堪へない、其近年の事跡は世人の記憶に新なるものが多いから茲には省略する。

(三) 斯の一事　米田龍平

大正十年年頭の天候靜穩にして寒氣緩かに、心氣自ら快を感ずるの時、故人西川

文藏君を追懷するの情甚だ切なるものあり。

君は活動の人として終始勇躍奮鬪、其鈴木商店に在るや謙讓自重、以て內外に信望あり、卽ち鈴木王國に於ける四天王の隨一として、其樞機に參與し、精勵恪勤誠直謹嚴を以て身を持し、後進に其範を示すと同時に、最も情誼に厚し、爾り君は實に現代的紳士にして、而も現代稀に見るの人士なりき。

特に君が嚴格なる性行の表現として、公私の書信に接する每に、事の大小輕重を論せず、或は業務以外の事柄と雖も、苟くも之を等閑放任するが如きこと斷じて無く、最も懇切機敏に應答するに在り、余が嘗て米國に在るの時、君に一書を飛ばして回答を要望せしに對し、事の業務以外なりしに拘らず、直に懇切丁寧に詳細なる回信に接せし爲め、却つて意外に研究せざるべからざるに至り、裨益せし所多大なるを痛快に感じたることありき。

斯の一事を以てするも、君の人と爲りを追想するに足るへし、君今や逝きて既に亡し、轉た悼惜の情に堪へず、偶々今回知己同志相寄りて君が追想錄を編輯するの企圖ありと聞き、聊か所感を錄して之に應ふと云爾。

(六) 西川文藏氏と其故郷

今井完造

西川文藏氏は近江國高島郡今津町の人、近江聖人中江藤樹先生と其郷を同じくし、而も先生の遺跡藤樹書院、及び遺愛の藤棚の在りし塲所を距る遠からず、漸く一里餘の處に成長されたのである、藤樹先生の名聲遺蹟は、喋々する迄もなく周知の事柄なれど、其德澤感化の拔んでて、此高島郡下に普及せられたることは特に推奬せねばならぬ、一例を擧ぐれば、曾て某藩の大名、格式の列を整へ此地を通行しけるに、田野に耕す農夫、誰れも農具を抛たず耕を休めざりければ、彼の大名不審に堪へず、其老臣を派して農夫等の行列を拜せざるを問はしむ、農夫始めて耕を止め一揖して、吾等銘々其の職を守れとは先生の敎なりと答へ、再ひ鍬を執りて顧る所なし老臣斯くと復命しけるに、藩主、吁々聖人の敎化斯の如きかと嘆稱して去りしと云ふ、又「名儒佐藤坦が先生の廟に謁せし時の詩賦の一節にも「……今尙士民敦禮讓人彊不問識君鄕」と推奬せられたり、共に先生の德澤感化が鄕民に普及せる有樣を

語るのである。

又一面に近江商人の名は、明治初年の頃までは、一本の天秤棒を肩にして、六十餘州を隈なく通商濶歩し、誠實を心の楯として、堅忍不撓の鐵腸を錬り、利を獲るに敏なりし、其商戰振りを稱揚したるものにして、今尚ほ北は北海道の隅々、西は九州の端々の地に至る迄、近江屋の商號を掛けたる商人の存ぜざるなきは、其名の餘影とも云ふべきである、斯くて近江聖人の名は道德教育の上に、近江商人の名は商業教育の上に、一般鄕民に感化を傳へたること言を俟たざれども、彼の司馬温公の所謂「金を積んで以て子孫に遺すとも、子孫未だ必しも克く守らず、書を積んで以て子孫に遺すとも、子孫未だ必しも克く讀まず」とかや、方今千古不磨の二大教訓も、久しく廢れて地に委し、正に温公の歎ありしも、氏は夙に鈴木商店に入り、二十有六年其半生を商店に捧げ、恪勤にして商機を逸せず、終始一貫、遂に鈴木商店の柱石として參與せられ、神戸の鈴木商店をして日本の鈴木商店たらしめられたのである、三千の店員を指導して意の如くならざるはなく、亦店員一度氏の面貌に接すれば、赤子の茲母に對ふが如く、相和して皆其德に化し、其職務に精勵するに至る、而も氏の己れ

を持する頗る恭謙で、其德海の如く、其才山の如きは偶然に非ず、卽ち其故鄕の二大教訓を遺憾なく鈴木商店に發揮して、彼の温公の歎なからしめたのである、氏大正九年五月十五日逝かる、可惜哉。

(元) 西川文藏君と兼助の短刀

森田葆光

大正三年二月、予移民監督として帝國丸に搭乘し南米に赴く、友人西川文藏君予に贈るに兼助作の短刀を以てす、劒光陸離人を射らんとす、造りは質素なるも刀裝總て完備せり、予は航海中靈神として一路の平安を祈り、病者の邪を拂ひ、死者の魂を弔ひ、日夕其靈氣に浴す、南米に北米に、到る處外人の觀賞に逢ひ、幾度か懇望を受けしも辭して讓らず、今に家寶として秘藏す、而して西川君逝く、劒存して其人亡し予豈今昔の感に堪へんや、深夜劍を拔いて燈下に見る、光芒閃々、西川君の面目眼前に躍如たるが如し、謹んで故人に對する所懷を述ぶ。

(三)君と我　岡勤一郎

畏友文藏西川氏逝く、氏に宿痾あり、歐洲の戰亂は店務の繁劇を來たし、氏に靜養の機會少し、精勵恪勤斃れて後已むの概あり、而して終に起たず、氏の病革るや、三千有餘の店員齊しく聲を呑み、其回春の速ならんことを禱る、氏今や亡し噫。

千羊の皮は一狐の腋に如かず、千人の諾々は一士の諤々に如かず、氏固と寡言諤々の言を聞くこと稀なりしと雖も、身を以て店員を率ゐ、知らず識らず德性を涵養せしめたるに至りては、其德豈啻一狐の腋と言はんや、余等氏の後塵を拜する者、追慕の情轉た禁ぜざるものあり、此時に際し先輩森衆郎氏、故人在世の逸事を蒐集して追懷錄を編輯し、氏を偲び又氏の遺子を敎ふるの料と爲さんと企圖せらる、寔に最好の美擧と謂ふべし、乃ち余に氏在世中に於ける逸事を徵さる、余素と不文贅疣を愼むの謙德を知らざるも、而も氏の厚誼を追慕するの情禁ずる能はず、感慨自ら湧き禿筆を呵して錄末を汚す。

余は入店後十星霜に近きも常に店外に在り、親しく故人に昵近して教を聞くの機會少かりしと雖も、時に店命を受くる事或は進言の事ありて氏の事務室に參趨するに、彼の和厚温穆靄然として迫るなき玲瓏たる人格に接し、感奮自ら止まざること多し、又幸にして行樂運動を共にせしことあり、左に一片の追懐を草し、讀者と共に長久に故人を偲ばんとす。

五年前新緑滴るの交、店員數百名と共に、南北朝の史蹟笠置山に遊びしことあり氏は統率者たり、舟中手づから沛を剝きて余に與へ、且山頂に達する急坂八丁の競走を余に挑む、余肥滿平地に於てすら疾走に便ならず、況んや急坂をや、氏は瘦身清癯鶴の如く快走極めて便なり、此對照の奇なる、恰もソマトーゼの看板の如きを見て、僚友の感興を唆る、拍手して皆此擧に贊す、然れども余の不運なる、氏の挑戰を拒めば僚友の感興を殺ぐこと頗る大なり、戰はんか勝敗の數戰はずして既に明かなり、進退茲に谷まる、私に思ふ、山靈の加護余に在らんか、勝敗未だ必ずしも知るべからず、啻に進退の兩難を脱するのみならず、勝利の榮譽余の双肩に耀かずとせんやと、奮然意を決して氏の挑戰に應ず、其結果や如何、十對三にて余は遂に敗る、山靈余

に善からず、拍手復た起る。

四年前の春、須磨大手の本家廣庭に催されし園遊會に參列す、此日櫻花爛漫春興湧くが如し、絶對權を有する運動委員の戯は、氏と余に等身大の綿製大圓球の競技に參加を宣す、距離は約百メートルの地點を指す、氏と余は赤色圓球にて、白色圓球は柳田重役と日野誠義氏なり、轟然號報一發其場に臨む、氏余に告げて曰く、君は渾身の力量を振うて球の中心をドンと猛突すべし、球の飛跳は顧慮する勿れ、我れは轉球の操縱に妙手を振はんと、余勇躍双手に有らん限りの力を込め圓球をウンと猛打すれば、球は矢の如く五六メートルの地先に飛ぶ、氏は直に轉跳する球に双手を掛け、進路を案配し巧に廻轉せしむる業殆ど奇術士に似たり、斯くすること十數回決勝點に達す、白球を拔くこと數十メートル、當日の一等賞品をお家樣より授與せられ、天晴名譽の勝利を得たりと雖も、余は流汗淋漓氣息奄々、疲勞將に倒れんとしたるに、氏は泰然自若として笑はる、滿場の觀者氏が輕快巧妙なる球の操縱振を感賞して止まざるもの久し。

或秋の日曜日、紅葉燃ゆるが如き好晴日に、余は豚兒を具して香櫨園の境奥ラヂ

ウム温泉に散策す、圖らず途中の松林間に氏と出會す、時に令夫人と愛兒三名を召具さる、余等親子の行樂を見て、君も温泉に遊ぶか紅葉を賞するか、今日曜の如き快晴甚だ稀なり、大に英氣を秋高に養ふべしとて、更に愛兒を顧みられ、此叔父さんが時々あの甘い尼崎の甘藷や鳴尾の苺を贈つて下さる御人だ、能く御禮を申せと、愛兒は直立低頭慈命を奉じて謝意を表さる、余は頗る面喰うて背に汗す、些細なる微志に對しても、氏は斯の如き細心温情を以て常に平素を持せらる、後進の勉めて學ばざるべからざる美德と謂つべし。

氏が書畫骨董の鑑識眼の卓拔なるは識者の定評あり、自己の爲にも交友の爲にも屢々其煩を厭はず、自他を益する尠少ならざりしは人の能く知る所なり、茲に追懷錄編輯の擧あるに際し、些か所感を述べ、以て其責を塞ぐと云爾。

(三) 岐阜の名物

加藤廉之助

私が故人と相知りましたのは廿四年以前でありまして、前半の十年餘は互に名

を知り顔を識る位でありましたが、其後職業の關係上接近する機會も多く、自然と御懇意に願ふ樣になりました、殊に最後の四年間は、私も鈴木商店に勤務することになりましたので、日々謦咳に接し、厚き御眷顧を蒙つた次第であります。

故人の人格に就きましては、既に世に定評もありまして、今更私共が呶々讃辭を呈する迄もないことでありますが、斯樣に永い歲月、容易ならぬ御引立を受けました私としては、其間腦裡に印しました一二を物して、既往を偲ぶのも人情自然の發露であります、私が故人に對し常に最も敬服する所は、公私の區別の嚴格であつたことゝ職務に勤勉忠實であつたことの二點であります、卽ち私共が日々賣るべく買ふべく商談に參つた折等、儼として一歩も假借せらるゝことなく、爲に今少しくお手柔かに願ひたいと感じたこともありましたが、翻つて私交の上に至れば、溫情實に春の如く其れ程公私の別が嚴正でありました、又日々孜々として繁雜なる商務を處理し、數多の店員を統馭して、三十年一日の如く勉められた此二點は、何人も追隨し得ぬ所でありまして、又何人も模範とせねばならぬ所であります。

斯樣に恪勤の人でありましたから、一面風流の質に富みながら、探勝遊覽等の旅

行をせらるゝ暇もなく、私が記憶する所では、故人が職務上なり遊覽なり泊りがけで旅行せられたのは、東京、關門地方、伊勢、備後、岐阜に各一回のみでありました、其中備後に薄荷の産況視察に赴かれた時と、岐阜に鵜飼見物せられた時との二回は、私もお供致しましたが、明媚なる岐阜の山水は特に故人を滿足せしめ、蓊蔚たる金華山下溶々たる藍川に棹して烏兎を待つ處、涼風醉顔を吹いて漸く佳興に入つた時「岐阜の名物鮎の魚……」の俗謠を耳にせられ、大に其調の面白きを喜ばれ、熱心習得遂に絃に和する迄巧みになられました、爾來私醼に於て興到れば、破顔之を低唱し、嬉々として娛まれ、同人亦之を聞かなければ止まないやうになりまして、岐阜の名物は何時の間にか故人の名物となりました、森支配人も故人を弔するの辭に於て、復た岐阜の名物を低唱せらるゝを聞くことが出來ないと哀まれましたが、私は岐阜の出でありまして、故人が習得せられました當時を熟知して居る爲に、一層之が思出の種子となりまして、追慕措かざる次第であります、嚴格なる故人の一面にも尙此名物があります、斯くてこそ公私の區別を明かにし、職務に勤勉忠實であつたばかりでなく、衆人思慕の標的となられた素因を窺知することが出來ます。

(三) 店員信服敬慕の府

土屋新兵衛

西川文藏氏は主家の爲に極めて忠實の人で、且人格手腕を兼ね備へ、加ふるに風容自ら具はり、又多年の間一日の如く、何時會ふても少しも變りなく、色々無理の事を賴んでも、遂一度惡い顏を見たことのない、誠に寛懷雅量の人であつた、殊に能筆の方で、頗る達意の手紙を書かれた、從つて手紙を上げると、其返事の迅速なる毎度驚かさるゝを常とした、而して後進に對しては、公私共に面倒を厭はず、懇ろに世話をされた、是れ自然に店員の信服敬慕の府となられた所以である、方今鈴木商店に多士濟々たるは、氏の感化薫陶に負ふ所が尠くないと信ずる、氏は鈴木商店未來の宰相として一般の重望を荷はれ、誰しも氏の爲に大なる將來を期待して居たに拘らず、天が假すに年を以てしなかつたのは、誠に痛恨に堪へざる次第である。

(三) 憶故人

人見一太郎

新聞雜誌で億萬長者と謠はれて居る現在はどうであるか知らぬが、やつと千萬長者になりかゝつた時の鈴木は、極めて質素なものであつた、僕が大里と東京とを往來するときは、大抵榮町の鈴木の本家に宿泊したが、本家の庭園は僅に十坪位で黑き高塀越しに稽古をして居る三味線の音が、手に取る樣に座敷に聞えて居つた其座敷で女主人公は、何時も僕を遠來の珍客の樣に待遇した、或日僕は鋤燒鍋を圍んで、女主人公、金子直吉、柳田富士松兩君と、所謂神戸牛の滋味を貪つて居つたが、沈着なる態度をした一人の若者が次の間に現はれた、女主人公の捺印を求めに來たものであらう、此若者が西川文藏君であつた、僕が西川君に會つたのは、之が始めて之が終りであつた、僕は此時君の顏を一二分間凝視したが、賴母しさうな人物だと感じた、其時であつたらう、「西川は自分の受持の仕事が濟めばさつさと歸つて行く」と云ふことを聽いたので、垢拔けのした面白き男だと思つた、僕は一度も西川君と言葉を交はしたことは無かつたが、鈴木の人で僕の處に來た者の話を綜合するに「西川さんは公平で虛心澹懷で、吾等の言ふことを能く聽いてくれますから下情が上達します」と云ふことに一致して居た、金子君が蕭何であり、柳田君が韓信であ

れば、西川君は周勃である、金子君の繼續者として鈴木を安んずるの責任は、重厚なる西川君の双肩に横はつて居たが、惜い哉壯年にして蘭摧の悲を見た、鈴木家の一大損失と言はねばならぬ、否國家の損失である。

西川君と書信の往復をしたのは、前後唯二回である、同君が「清風帖」を贈られた時と、僕が、增給を少くして一生涯鈴木に使つてもらうことに賴んで置いた一人が辭表を提出したので、如何にしやうかと問合せて來た時とであつた、同君が書畫の鑑識に非凡であつたことは、君の愛藏品の縮圖たる「清風帖」によりて明白である、西川君は機敏なる事務家であると同時に、思慮あり同情あり衆人の歸依に相當する人格者であつた、大商店の臺所を擔當するに堪ふる經濟家であると同時に、文藝三昧に遊戯した人であつた「清風帖」は空しく僕の書齋に留つて、春風秋月、故人を追憶せしむるのであらう。

㈢ 國家の一大損失

田口治三郎

回顧すれば、私が初めて故人に御面會致しましたのは、明治四十一年五月で御座いますが、正直に申せば、直接御指導を仰ぐ機會は極めて少かつたので、故人の平生に付ても、取り出でて申す事は御座いませぬけれども、要するに故人は、人と爲り温厚謹直沈默寡言で、最も友情に厚く、且細心綿密至誠力行の人であられたことは、今尙ほ忘れることが出來ませぬ、誠に大人の風格を具へた人で御座いました、故人が明治二十七年三月以來二十有七年の久しき間、一意專心鈴木商店の爲に店務を鞅掌せられましたが、鈴木商店今日の盛大を致しましたのも、故人の力與つて少からざることゝ信じます、今後も故人の劃策と努力とに待つべきもの多々あつたことゝ存じますのに、天年を假さず、一朝病の爲に齡知命にも達せずして逝去せられましたことは、眞に千秋の恨事と申さねばなりませぬ、此れ啻に鈴木商店の甚大なる損失であるのみならず、國家の一大損失でありまして、店主を初め重役諸士の御失望もいかばかりかと拜察致します、殊に方今財界變動の結果、鈴木商店の業務上に於ても、各般の整理改善を要するものあるの時に際しましては、一層故人を思ふの情切ならざるを得ない次第で御座います。